

歌誌 黄雞「冬号」 追悼歌・投稿歌・「夏炉冬扇」寄稿 (新仮名)

山形短歌会 黒沼 貞志

追悼歌(阿部京子先生)

我もまた何れは果つる命なり先逝くわが師を遠地で憶う

歌題 入相の鐘

閑ぎあう花壇と菜園リニユーアル狭さの中の妻との会話

山里の初夏を先取る姫さゆり棚田を背に咲き一服の軸

朝明けて「ぼっ」とほころぶシャラの花若やぐ夏の色の真白き

荒梅雨の上がりし空へ一条の虹の架かりし里は夏の色

打ち水に暑さ鎮まる夕間暮れ漂う昭和の土の香微か

サンダルで御釜の傍ら歩み行く深碧色のペディキュアの足

蝸に誘われ集う且坐喫茶余韻の帰路の入相の鐘

県境のふところ深きブナの森われ抱かれてサンクチュアリ

照り紅葉かたわらの川に煌めいて共鏡のごと旅人癒す

親と子が点景となる杜の丘黄昏降りくる秋の野遊び

里の村稻かけに舞う雀らは人の都合で好まれ疎まれ

群衆とポリスで荒れる渋谷街今は懐かし創始のハロウィン

廃屋に歩みを止めし柱時計残りて語るや家族の営み

ハレの日に友への陰膳設える吾子の紡ぎし絆憶えり

フィットネス平日ひらびの日中ひなかはシルバーのサロンと化して世相の縮図

同号「夏炉冬扇」への寄稿

自分史へのアプローチ

黒沼貞志

その一：DVD版「私的アンソロジー」の上梓(日本自分史センターへ寄贈)

山形の地に生まれ育まれ巣立った雛が歩むが如く、県外での三十年の社会生活の中で揉まれながら巷の一員として家族(連れ合いと子)を持ち、多くの方々との交流を通じて頂戴した「糧」を活かす(場・時間)として五十代に入ってふるさと山形へのUターンを選びました。

その後の八年の月日の中で故郷の懐の深い多くの知己に支えられ活かされて一つの節目六十歳を迎えることになり、それを契機に辿った道のりを整理すること自身その後の【林住期】における羅針盤としたいという思いから、運用中のHP内のデータを「核」としたDVD制作を思い立ちました。

このDVDは自身への(ほうび)と考えたところですが身内からは「分を弁え、見せられる相手を考えて程々に・・・」と釘をさされたことも事実です。

自身の存在証明といえ言い過ぎ、あるいは「あがすけ(ふるさとの言葉でいい格好をするの意)」でしょうか?自身をそうさせるのは根っこにある「好奇心」のなのかもしれません。

このDVDは自身の仕事とは別のアクティビティの【写真】を「主役」としながら幾つかの「(迷)脇役(著作・寄稿・映像・画像・音声など)」で支える形式で構成した「私的アンソロジー」となっております。

その二冊子版「続・私的アンソロジー〈しあわせの構図〉」の発刊（県立、市立図書館へ寄贈、国立国会図書館に納本）

林住期の終盤にあたる七十歳を迎えた折にその後の【遊行期】への羅針盤となりこのところ衆目が集まる「自分史」の端緒になればとの思いから冊子版「続・私的アンソロジー〈しあわせの構図〉」の制作を思い立ちました。

冊子は発刊に寄せて・プロローグ・写真・短歌・写真短歌・コラム「飛耳長目」・年譜（地域活動のサマリーを含む）・エピソードなどで構成しております。プロローグには前述のDVDの中からマイプロジェクト・地域力共創への歩み・写真などを再編して組み入れ、新たにUターン後にライフワークとなった短歌・写真短歌・コラム「飛耳長目」を掲載しております。

なお、「発刊に寄せて」には社会に出てからこれまで約半世紀の様々なシーンでお付き合いとご指導を賜った方々七名（黄雞社運営委員長阿部先生からも戴いております）の方々から内容の未熟さを補って余りある言葉を頂戴しております。

黄雞社本社、各支部に一冊謹呈しておりますB5版の装丁、百五十六頁の本冊子は制作部数の制約を補うためパソコン上で本を捲るように見ることができ「デジタルブック版」も制作しWebサイト上に公開しております。

<http://sk-solutions.org/shiawasenokouzu>

また、今秋にリニューアル公開する弊HPのアーカイブスの中でこのデジタルブックを公開しております。